

卒業論文

「男らしさ」を捨て始めた若者たち

——私生活を考慮した就職活動から——

2016 年度入学

九州大学 文学部 人文学科 人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専門分野

2021 年 1 月提出

要約

本研究は、若年男性が就職活動において私生活を考慮した経緯や、彼らがそのような就職活動を行ったことで生じた困難などについて、「男らしさ」などのジェンダーに対する意識とともに明らかにすることを目的としたものである。

この目的を達成するために、まず様々な先行研究について検討を行った。はじめに、本研究では「男らしさ」を「男性が持つことを期待される、男性であることを示すような性質」とし、伊藤公雄の研究をもとに、具体的に①客観的で合理的な視点をもつこと、②泣き言を言わず1人で堪えること、③他者、特に女性に対して庇護できる力を持っていること、という3つ要素を持つものとして定義した（伊藤 1996）。その上で、多賀太の研究をもとに、若年男性が私生活を大事にするようになった背景として、男性問題への関心が高まったことがある可能性を指摘した（多賀 2006）。

次に、男性の家事・育児参加とそれに関連している日本的な雇用構造について整理した。具体的には石井クンツ昌子の研究をもとに、政治的要因と文化的要因の両方によって、男性が家事・育児に参加する、というイメージができたことをまとめた（石井クンツ 2013）。また、冬木春子の研究をもとに、仕事のために育児に思うように関われないことで男性に仕事と育児の葛藤が生じ、男性の育児意欲が低下することについてもまとめた（冬木 2008）。これらの研究から、若年男性が私生活を考慮して就職活動を行った背景として、「将来育児に参加しやすい就職先を選んでいる」ことがある可能性が浮かび上がった。

また、大槻奈巳の研究をもとに、「男性は雇用が不安定化しても稼ぎ手役割意識を持ち続けていた」という傾向をまとめた（大槻 2012）。ここからは、私生活を考慮して就職活動を行った男性には、稼ぎ手役割意識を持っていないという新たな特徴がある可能性が浮かび上がった。

さらには、多賀の研究をもとに、「伝統的」男女観と男女平等主義の間で葛藤を経験していた青年期男性の存在や、青年たちのジェンダー形成をめぐる状況の多様性などについて整理した（多賀 2006）。その上で、多賀の研究から約20年経った現在の状況を、就職活動という機会に着目して分析することを、本研究の目標とした。

これらの先行研究の整理を踏まえ、若年男性の私生活を考慮した就職活動について「男らしさ」などのジェンダー意識とともに明らかにするために、本研究では就職活動を既に終えている4人の男性に半構造化インタビューを行った。調査対象者としては主に私生活を考

慮して就職活動を行った 22 歳から 24 歳（インタビュー当時）の男性を選び、彼らに対して、勤務時間・休日や育児など、私生活に関する諸条件についてそれぞれ考慮するようになった経緯を尋ねた。また、稼ぎ手役割意識などのジェンダー意識や、私生活を考慮したことによる就職活動における困難などについても質問を行った。

調査の結果、私生活を考慮して就職活動を行った背景には、健康維持のためにリフレッシュを行いたいという意識や、交際相手など人間関係を大事にしたいという意識などがあつたことが分かった。また、私生活を優先させるために高い収入を得ることにこだわっていないかった傾向や、稼ぎ手役割意識を持っていなかった傾向も明らかになった。そして、稼ぎ手役割意識を捨てていた背景には、大学での学びなどによって生まれたジェンダー平等意識や、旧来の働き方を見直す姿勢、私生活を優先させるために収入にこだわらなくなったことがあったことが分かった。また、経済的な停滞によってやむを得ず稼ぎ手役割を捨てざるを得ない状況にあることが、稼ぎ手役割意識の希薄化の背景にある可能性があることも分かった。そして、これらに共通していたのは、調査対象者たちが「休まずにたくましく働くこと」、「周囲に頼らず独立して生きること」、「高い収入を得ること」、「稼ぎ手役割を担うこと」といった「男らしさ」から自由になっていた点であった。ただ、彼らはジェンダー平等意識を持ち、将来の育児に対して漠然と意識していた一方で、自らが責任を持って育児を担う、という意識が乏しかったことも明らかになり、「男らしさ」を捨てていた調査対象者たちであっても、育児に対する意識は女性との間に差がある可能性があることが分かった。また、調査対象者たちの私生活を考慮した就職活動によって、就職上の有利・不利といった困難が生じたことはなかったことも明らかになった。つまり、調査対象者たちが「男らしさ」という固定的なジェンダーに対する考え方を捨てていたことだけでなく、社会全体としても男性が私生活や自分を大事にすることの重要性が認知され、就職活動にも変化が生じてきていることが分かった。これらの新しい動きは、ジェンダー平等な世の中を実現するために必要なことであり、今後もこの新しく始まった動きが広がっていくことが期待されると言える。

今後の課題としては、質的調査だけでなく量的調査も行い、本研究の結果が若年男性全体にどれくらい当てはまるのか調べることや、学歴や地域性といった要因が与える影響について考慮し、大卒でない者や他の地方で育った者に対しても調査を行うことなどが挙げられる。

目次

1はじめに.....	1
1.1 問題意識.....	1
1.2 本研究の構成.....	1
1.3 「私生活」の定義.....	1
2先行研究.....	3
2.1 「男らしさ」や男性問題に関する研究.....	3
2.2 男性の家事・育児参加と日本的な雇用構造に関する研究.....	5
2.3 男性の稼ぎ手役割意識に関する研究.....	9
2.4 ジェンダーから見た就職活動の研究.....	12
3研究方法.....	17
3.1 調査目的.....	17
3.2 調査対象.....	17
3.3 インタビューの内容.....	18
3.4 調査対象者の選定方法.....	18
4分析.....	21
4.1 長時間勤務への批判的考え方.....	21
4.2 人間関係のために働く場所を大事にする傾向.....	24
4.3 収入よりも私生活と仕事の内容を優先.....	29
4.4 稼ぎ手役割意識の希薄化.....	32
4.5 私生活を考慮したことで直面した就職活動における困難.....	39
4.6 育児への漠然とした参加意識.....	42
5結論.....	44
5.1 「男らしさ」を捨て始めている傾向.....	44
5.2 本研究の限界と今後の課題.....	44
[注]	46
[文献]	47
謝辞.....	48